

『音楽療法の現在』

国立音楽大学音楽研究所

音楽療法研究部門編

屋部 操

本学附属の音楽研究所音楽療法研究部門は、本年3月をもって8年間の活動を閉じた。研究活動と研修生への教育のほか、毎年外部からの講師を招いての、さまざまなテーマによる連続講演会は、学内外から高い評価を受けており、活動の三つの柱それぞれが、大きな成果をもたらしている。

研究所活動が一段落することになり、何か記念になる出版物を出そうという流れはごく自然なもので、部門のスタッフだけでなく、これまでの連続講演会講師も快く寄稿して下さることになり、結果として大部な出版物となった。論文は、これまで音楽研究所年報に掲載したものと連続講演会でのテーマをもとに執筆したものが中心で、中には新たにこの出版のために書き起こされたものもある。

出版に当たつてのポイントの一つは、海外から招聘した講師の講演の記録を活字として残すことであつた。どの講師も、この企画を快諾してくださり、日本語による音楽療法の出版物としては、一冊の中にそうそうたる顔ぶれが並ぶこととなつた。374ページの、ずっしりと重い本である。内容を目次順に一覧してみると、

稲田雅美 沈黙に寄り添う音楽ととも

遠山文吉 子どもの音楽療法―「対象の理解」と「目標の設定」に焦点をあてて

古平孝子 内面性の諸現象と分析的音楽療法―20代女子学生へのアプローチ

中野万里子 音楽療法セッションにおける「場」―統合失調症患者への音楽のアウトリーチ

馬場存 精神科の音楽療法における音楽について

門間陽子 高齢者領域の音楽療法のねらいはどこにあるのか―岐阜県音楽療法士の事例集を通じた考察

岡崎香奈 音楽療法士が「自分と音楽との関係」を見直すこと―感性化トレーニング体験記から

林庸二 "Therapy" の語源から見た音楽療法

阪上正巳 「臨床音楽学」の可能性―音楽療法の基礎学として

谷口高士 音楽療法において心理学的方法論をどのように生かすか―臨床実践の外から見た音楽療法

若尾裕 ドゥルーズ+ガタリの音楽論と音楽療法

真壁宏幹 「シンボル感の生成」としての美的経験―パウハウスにおける「音楽教育」をめぐる

牧野英一郎 「替え歌」から「つくり歌」と「歌掛け」へ―多くの日本人に受け入れられる療法モデルを求めて

屋部操 音楽雑誌にみる音楽療法関連文献

以上が論文。講演記録は以下の5名である。

*ケネス・E・ブルーシア

*バーバラ・ヘッサー

*キヤロライン・ケニー

*ブリュンユルフ・ステイーゲ

*井上勢津

一覧すると、音楽療法における現在が浮かび上がってくる思いがする。ここには臨床報告やデータに基づく論文は含まれておらず、学際的な論述も含め、どれもが音楽療法の質を問うものとなつている。執筆を依頼するにあたり具体的にお願いしたことではなかったが、結果としてそうした論文が集まり、編集の末端に関わったものとしてたいへんに満足のいく仕上がりとなつた。図書館員として研究所活動に出向させていたいた8年間の総決算がこのようなかたちで残せたことは、とても幸せな体験であつた。